

牧師になりたての頃、日頃から敬愛していたある老牧師と葬儀をめぐる対話をしたことがありました。いつの間にか愛唱讃美歌の話題となり、その方が「葬儀のときには175番（1954年版）を歌ってほしい」と述べたのです。それまでわたしが一度も歌ったことのない讃美歌だったので、その場で老牧師は静かに口ずさんでくださいました。その歌声に聴き入りながら、この方の誠実にして真摯なたたずまいが、何に基づくものであるかを示されると共に、自らがこの事柄について丁寧に思いめぐらしたことがなかったことを深く恥じ入り、反省させられたことでした。それは次のような歌詞です。

我世にある間に 為せる業を 包まず御前に 述べ得べきか
潜める思いも 主知りませば 露わに受くべし その報いを
善し悪し漏れなく 審かるれば 慎み祈りて わが世を送らん
死の時いつとも 我知らねば いざ疾く御神と 和らがまし

明らかにこの方は、最後の審判の時に神の御前に立つ自らの姿を思い描きつつ、日々牧師としての歩みを全うされていたのです。

「隣人に関して偽証してはならない」（出エジプト記20章16節）とは、十戒の9番目に記されている戒めです。イスラエル共同体の法的秩序の根本を支える律法です。科学的捜査法のない時代には、裁判において有罪か無罪かを決する上で、証言が極めて重要な意味を持ちました。もしそこで偽証が安易になされれば冤罪事件が頻発し、共同体の法的秩序が根本から揺らいでしまいます。それだけに裁判における証言の真実性が、重要な課題として問われたのです。

その際、人に真実な証言をなさせる根源的な力となるものは何でしょうか。もちろん活ける神への活ける信仰です。自らの言動について、人と人との水平次元の関わりを越え、世の終わりの審判において聖なる義なる神の御前で申し開きをすること、その説明責任を果たさなければならないという事実です（コリントⅡ5章10節）。「神を畏れ」ること、神のみを崇めることが真剣に受けとめられるところでこそ、人はこの世の権力者の思いを付度し、上司の顔色を窺い、自己保身のために汲々となって偽証に偽証を重ねることからも解き放たれるということでしょう。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」（マタイ10章28節）ということだからです。

審判ということ思いめぐらす時に、赦しの問題も真剣に問われなければなりません。なぜなら義にして聖なる神は、同時に憐みと愛に富んだ神にほかならないからです。事実、主イエス自身も、「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来た」（ヨハネ12章47節）と明瞭に告げておられます。それなら神の義と愛、神の裁きと赦し、この激しく矛盾する事柄は、いかにして一つとされるのでしょうか。それはただ義なる聖なる神が、罪人の上にくだすべき審判を、罪なき神の独り子の上にくだすという最も逆説的な十字架における愛の業を通して貫かれたのです。御子イエス・キリストのわたしたちのための身代わり死の故に、私たちは罪赦されし者として神の裁きの座に立ち得るのです。

三木清は「Ira Dei（神の怒）、キリスト教の文献を見るたびにつねに考えさせられるのはこれである。……愛の神は人間を人間的にした。それが愛の意味である。しかるに世界が人間的に、余りに人間的になったとき必要なのは怒であり、神の怒を知ることである。今日、愛については誰も語っている。誰が怒について真剣に語ろうとするのであるか。怒の意味を忘れてただ愛についてのみ語るということは今日の人間が無性格であるということのしるしである」と喝破しました。

神への畏れということが忘却され、ただ人間同士の水平次元で語られる証言は、いともたやすく偽証に成り果ててしまいます。嘘とは“口”が“虚”と書きますが、空疎で虚ろな言葉が横行する時代に、宮城学院に連なる者は、あらためて「神を畏れ、隣人を愛する」というスクール・モットーに示されている今日的課題を真摯に受けとめなおし、教育の現場で全うしていく者でありたいと願うものです。